

# 2021 年度事業計画

(自 2021 年 2 月 1 日～至 2022 年 1 月 31 日)

公益社団法人 日本薬学会

## I はじめに

日本薬学会は約 16,000 名の個人会員と約 200 の団体・企業の賛助会員を擁し、1880 年の創設以来 140 年を超える歴史と伝統を誇る薬学における中核的学術団体です。これまで「くすり」「薬学」をキーワードとするあらゆる学術活動、すなわち創薬から医療までを包括した学術活動、また基礎科学から応用科学までの広範な専門領域に関する学術活動を支援して参りました。2021 年度におきましても、会員の皆様の支援と学会の発展のために種々の取り組みを進める所存です。

2020 年の第 140 回京都年会は新型コロナウイルス感染拡大のため、誌上開催となりましたが、未だ収束の気配が見られない厳しい状況下、第 141 回広島大会は 2021 年 3 月 26 日から 29 日までオンラインおよびオンサイトでの開催になる予定です。テーマは「革新的創薬と持続的医療の融和」という、まさに未曾有の新型コロナウイルス感染拡大の現状に即したもので、充実したプログラムが企画されています。通常開催にもまして活発な討論・意見交換が行われることを期待しています。

日本薬学会は Chem. Pharm. Bull. (CPB、創刊 1953 年)、Biol. Pharm. Bull. (BPB、同 1978 年)、薬学雑誌 (同 1881 年) の学術誌 3 誌、ならびに学会の情報誌としてファルマシア (同 1965 年) を発行してきました。これらは J-STAGE による閲覧が可能で利便性が向上しています。また 2018 年 10 月からは生物系のオープンアクセスジャーナルとして新たに BPB Reports を刊行するなど、薬学の進展に貢献して参りました。さらに、2020 年 1 月より CPB および BPB の Newsletter をメールマガジンとして読者への配信し、最新号の graphical abstracts から、J-STAGE を通していち早く論文にアクセスできるようになりました。これらの方策により、論文の被引用回数および当該学術誌へ投稿数の増加を期待しています。

日本薬学会は、これまで国際薬学連合 (FIP) やアジア医薬化学連合 (AFMC) との連携を積極的に行い、またドイツ薬学会 (DPhG) と韓国薬学会 (PSK) との相互交流やドバイ国際医薬品会議 (DUPHAT) への講師派遣など、国際的活動を推進してきました。さらに 2020 年にはカナダ薬学会 (CSPS) との交流事業が始まり、CSPS-PSJ Banff 2021 Conference (2021 年 6 月 1 日～4 日) を共同開催することになっています。加えて 2021 年には AFMC 主催の AFMC International Medicinal Chemistry Symposium (AIMECS2021) が東京で開催される予定であり、また、FIP が主催する第 8 回 FIP 世界薬学会議 (PSWC2023) の日本での開催準備も進んでいます。第 140 回大会 (京都) から設けられた交流国の特別講演と薬学会の招待講演で構成される英語セッションは、第 141 回大会 (広島) では枠がさらに拡大されています。2021 年もこのような国際交流活動を積極的に推進してまいります。

日本の学術活動が 2000 年以降急速に低下していることが、発表論文数、引用回数、博士課程学生数など、多くの指標で明らかにされています。文部科学省は若手研究者育成を目的に、2020 年 12 月に、博士課程進学者の約半数 (1 万 5000 人) への年間約 200 万円の支援を見込んだ計画を公表しました。日本薬学会はすでに 2015 年から博士課程への進学促進を目的に長井記念薬学研究奨励支援事業を開始し、給付型の奨学金を提供し、全国の学生を支援しています。また、本学会奨励賞や、各支部や部会における様々な顕彰事業を通じて若手研

究者の支援に努めています。日本の科学力・薬学研究力の一層の発展を期待し、このような支援を長期的に実施してまいります。

2020年は全世界が新型コロナウイルス感染症の猛威に晒され、以前とは世界が一変してしまいました。感染拡大の速度は非常に速く、世界が一つに繋がっているグローバル化の現実を実感することになりました。抗ウイルス剤だけではなく、免疫抑制剤、抗炎症剤など多種多様な薬剤、mRNA ワクチンという史上初のワクチンにも関わらず異例な早期認可など、薬学に密接に関係するニュースに頻繁に接することになりました。本学会もホームページに情報を一般公開するなどして、「くすり」に関する情報センターとしての役割を果たすことができるのではないかと考えています。本学会には専門性の異なる10部会が活動しており、それぞれはグローバルな活動を展開しています。しかしながら、残念なことに部会どうしの横のつながりは希薄で、新型コロナウイルス感染症に関しても異分野の情報交換はスムーズではありません。部会どうしの融合的活動は、異分野とはいっても理解しあえる範囲内の薬学領域の中ですから、きっかけがあれば実現可能と思われます。新型コロナ禍で体験したりリモート会議を使えば、臨機応変に、日本中のどこでも誰とでもすぐにアイデアを交換することができますし、異分野融合によって薬学領域に革新的な研究の種が生まれると期待されます。本年は、このようなデジタル技術を取り入れるなどして、運営効率化や学術活動のより一層の発展を目指し、本学会の改革の一歩にしたいと考えています。

## II 事業計画事項

### 1 2021年度代議員総会の開催

2021年3月26日（金）にオンラインにて開催します。

なお、代議員総会は代議員をもって構成する総会ですが、本学会会員であれば総会に出席して意見を述べるすることができます。

### 2 学術研究・教育活動の推進

#### 1) 学術誌の発行

##### (1) 発行と情報発信

質の高い研究成果の投稿を促進しながら、出版までの作業を迅速、正確かつ効率的に行い、薬学ならびに関連諸科学の発展に寄与してまいります。各誌の特性、Scopeを最大限に活かし、学術論文発表の場の提供と学会賞受賞記念総説の掲載など、誌面の充実を推進いたします。誌面に携わる関係研究者の意見を広く取り入れ、学術誌発行の意義と成果につき、さらなる飛躍を目標に検討を行い、需要に即した価値のあるジャーナルを目指します。高度情報化社会の趨勢を視野に Featured Article の公開・英文誌のニュースレター配信等、効果的な情報発信を行ってまいります。

本年度の学術誌の発行予定は次のとおりです。

- ・YAKUGAKU ZASSHI（第141巻）年12回
- ・Chemical and Pharmaceutical Bulletin(CPB)（第69巻）年12回
- ・Biological and Pharmaceutical Bulletin(BPB)（第44巻）年12回

##### (2) 授賞

学術誌発行において審査に貢献した査読者、被引用数の高い論文、掲載数の多

い著者（連絡著者に限る）を選考し、賞を授与します。

- ① Top Reviewer Award  
YAKUGAKU ZASSHI、CPB、BPB
- ② Highly Cited Review Award  
Highly Cited Article Award  
CPB、BPB
- ③ The Most Published Author Award  
CPB、BPB

## 2) 生物系オンラインジャーナル「BPB Reports」の発行

生物系のオープンアクセスジャーナルとして、2018年10月より「BPB Reports」を発行しています。発行責任は環境・衛生部会です。「BPB Reports」の編集委員長が学術誌編集委員会の部門長を兼ねることにより、日本薬学会のジャーナルとしての情報共有と一貫性を保ちます。

## 3) J-STAGE との連携

国際発信力強化の一環として J-STAGE と連携し、新たな取り組みへの参画、公開内容の充実を図ります。

## 4) 学術研究集会の開催および部会・支部活動の支援（別紙1）

### (1) 年会の開催

年会はひとつの学術大会の枠にとどまるのみでなく、日本の科学研究に貢献する重要な事業であり、本学会の目的である薬学の進歩・普及ひいては学術文化発展の実現を支援しています。特に薬学を学ぶ学生にとっては学会との最初の接点となる場であり、また、薬剤師職能団体や製薬企業関係者との相互連携およびドイツ、韓国各薬学会などの国際機関との交流促進の場となっております。

年会での英語のシンポジウムの開催の奨励や海外からのシンポジストの招へいの支援、英語での発表のプログラム配置を工夫することなどにより海外からの参加者の利便性を図るなどし、引き続き年会の国際化を推進いたします。

### (2) 部会の活動

部会は、薬学研究の高度化と若手研究者・薬学生など次世代を担う優れた人材の育成を共通の主要課題とし、シンポジウム、フォーラム、研究会ならびに顕彰活動などを通じ、各部会の特長に合わせて特色ある活動を進めてまいります。部会活動の円滑化をはかるため、部会長会議を開催し、連絡調整・情報交換を行います。本年度の各部会の活動は（別紙2）のとおりです。

### (3) 支部の活動

支部は、会員と日本薬学会との接点の場です。地域薬剤師会との交流、最新薬学講習会、卒後研修会、高校への薬学ガイダンスなど地域に密着した積極的な事業展開を行い、特に6年制の学生の支部大会への参加を積極的に奨励し顕彰するなど、学生会員の確保に繋がるよう努力してまいります。支部長会議では、理事

会の動向を把握し、ともに連携しながら活性化を推進してまいります。本年度の各支部の活動は（別紙3）のとおりです。

#### （4）創薬セミナーの開催

創薬セミナーは日本薬学会の看板セミナーです。「創薬」を中心テーマとする本セミナーでは、産学官の第一線で活躍する講師の講演を聞き、参加者は忌憚りの無い意見を交換してきました。また、全ての参加者は同じホテルに泊まり、文字通り寝食を共にしながら創薬の夢を熱く語り合うという開催形式をとって参りました。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大を受け、昨年2020年度は開催を断念いたしました。現在、コロナ感染症の終息も見通せないのが現状であり、本年度についてはオンライン開催とすることといたします。

本セミナーは、30年にわたり創薬研究者の育成に取り組んできました。これまで創薬への夢をもつ、多数の若い企業研究者が参加していることから、セミナーの使命は十分に果たされてきたといえます。

2021年度のセミナーは、これまでと大きく異なり、合宿形式でなくオンラインでの開催となりますが、日本を支える基幹産業としての製薬業界の今後を展望し、創薬研究の新しい展開を追求できるように運営を行ってまいります。オンライン開催にあっても、全員参加型セミナーとして、講演や自由討論会を充実させ、新たな視点を導入したセミナーとなるよう計画します。

### 5）学術研究・教育活動の奨励・表彰

#### （1）研究奨励

日本薬学会では、博士の学位を有する多様な薬剤師あるいは薬学研究者を輩出することを使命として、学位を取得するための研究に専念できる環境を整備すべく長井記念薬学研究奨励支援事業を行ってまいります。2021年度も同様に募集を行い、支援事業の趣旨に沿って選考を行ってまいります。

#### （2）授賞

日本薬学会の学術研究評価および活性化事業として、会員の卓越した業績に対し、下記の賞について授賞候補者の推薦募集を行います。選考手続きを進めるにあたっては、それぞれの賞の趣旨に沿って選考を行ってまいります。

- |                |              |
|----------------|--------------|
| ① 薬学会賞         | 4件以内         |
| ② 学術貢献賞        | 6件以内（1件/1部門） |
| ③ 学術振興賞        | 6件以内（1件/1部門） |
| ④ 奨励賞          | 8件以内         |
| ⑤ 女性薬学研究者奨励賞   | 2件以内         |
| ⑥ 創薬科学賞        | 2件以内         |
| ⑦ 教育賞          | 2件以内         |
| ⑧ 功労賞          | 1件以内         |
| ⑨ 佐藤記念医療貢献薬剤師賞 | 1件以内         |

#### （3）他機関関係賞などへの推薦

各種財団・機関が募集する関係賞や研究助成などの本学会への推薦依頼に対

し、内容を検討の上、本学会会員より候補者を積極的に推薦します。さらに、国（省庁）による表彰についても候補者の推薦依頼に応じて同様に推薦します。

## 6) 薬学教育基盤の整備

日本薬学会にとって「薬学教育」は学会全体で取り組むことが相応しい事業です。医療や医薬品に関する知識や科学技術の進歩は目覚しく、薬剤師や創薬研究者が社会から求められる役割も変わりつつあります。これらを網羅して大学で習得することは現実的には不可能であり、最先端の知識や技術もすぐに過去のものとなってしまいます。したがって、その分野に進んでも、今後の進歩に対応できる基本的な資質と能力の涵養を図るとともに、生涯にわたって研鑽を続け、社会に貢献していく人材を育成しサポートすることが求められます。

薬学教育の基盤を整備し、質の向上を図るには、教育の現状を把握して課題を明確にし、解決に向けた対応策を練り計画を実行していくことが必要です。日本薬学会は、薬学教育の改善・充実のために、他の薬学関連団体と協力して薬学教育に関する課題の発見・解決に取り組むとともに、会員の教育能力の開発および向上を支援する機会を提供して参ります。

## 3 学会情報の配信

薬学の学術教育研究、医療における薬学の貢献、さらには薬学分野の行政・産業などの最新の動向を、会員間のみならず広く社会と共有し、健康福祉社会の発展に寄与してまいります。会員に対しては、会員のニーズを的確に把握してその満足度の向上をはかり、非会員の薬学関係者に対しては本学会活動の意義を理解することで入会を促し、一般（広範な非会員）に対しては、薬学と医薬品に対する関心と理解を深め、本学会活動への賛同・支援の獲得に努めていきます。

### (1) 社会への発信

日本薬学会では 2016 年度から男女共同参画推進の取組みを開始し、2017 年度には男女共同参画学協会連絡会にオブザーバー学協会として加盟しました。本学会は、新しい未来を創造しながら、生命現象の解明と医薬品の適正使用をめざし、人類の健康と福祉のために着実な発展を続けています。男女共同参画を推進することで、性別年齢を問わず、すべての人が対等な立場で個性と能力を十分に発揮し、自らの希望に沿った形で活躍できる男女共同参画社会の実現に寄与します。

2020 年度は、多様な属性の人材が活躍できる Inclusive な社会作りを目指した活動に取り組むために、委員会名を「ダイバーシティ推進委員会」と改め、さらに女性研究者のキャリアアップ並びに研究活動の支援を進めるために、「女性薬学研究者奨励賞」の設立を理事会に提案し、2022 年度の授賞に向け 2021 年度からこの顕彰活動をスタートすることとなりました。

加えて、今年度も広島年会において、ダイバーシティ推進に視点を移した内容でシンポジウムを開催することとしました。シンポジストとして、内閣府、製薬企業、そして日本学術会議から専門家をお招きし、様々な組織でのダイバーシティ推進に関する理念や取り組みを学ぶとともに、提供いただいた情報を基に会場の聴講者の方々とともに議論を深めることで、薬学会に於けるダイバーシティ

推進のための方策を探りたいと考えています。

## (2) 会誌の発行

薬学は、創薬・生命科学の基礎研究から創薬開発、薬の臨床応用、薬剤師教育まで幅広い領域をカバーし、また日本薬学会は大学等のアカデミアに属する教員、学生から薬剤師、企業人まで広範な会員で構成されています。ファルマシアは会員誌として、会員に広汎な情報を提供するのみならず、学会の広報として内外の情報を分かりやすく、また親しみやすく提供することも目的としています。

また、新規会員の増加につながるよう、創薬に関わる若い研究者、ベンチャーを含む企業、学部学生・大学院生などが興味を持つ読物をさらに充実させて魅力ある雑誌をめざすとともに、広報委員会との連携を図りながら、医療薬学系読者向け分野のテーマの充実を目指します。

なお、本学会会員には、購読者番号とパスワードの入力により、本誌発行日にJ-STAGE 掲載のWEB版を閲覧可能としております。また、発行後1年経過した掲載分を全文公開することにより、ファルマシアを広く周知出来るよう情報発信に取り組んでまいります。

## (3) ホームページの更新

学会における学術活動や事業に関して迅速な広報活動を行い、会員に資する最新情報の提供に努めます。アーカイブの整理を継続し、特に検索エンジンを通じたアクセス数が多い「薬学用語解説」の整備を実施します。また、「ファルマシア」電子雑誌版公開を試験的に実施し、読者の感想などを収集し、利便性向上の参考とする調査を行います。

## (4) メールマガジンの配信

メールマガジン「PSJファームナビ」は年間8報を目処として、会員へ日本薬学会の理事会方針を速やかに伝達し、情報を共有化します。配信開始から10年を超えたこともあり、より伝わりやすい情報発信を目指します。また、学術誌編集委員会と連携し、会員や学術誌著者宛に配信される英文メールマガジンでの情報発信整備を行います。

## (5) 報道機関対応

メディア（報道機関等）に対して、薬学と薬学会に関連する最新情報の提供と意見交換の場を設けることで、社会へ向けて開かれた学会としての窓口構築に努めます。

## (6) 刊行物

薬学を紹介する小冊子2種（「これから薬学をはじめるあなたに」「高校生のための薬学への招待」）全面改定版発行を受け、学会内および関係機関での活用を促し、薬学への興味が高まるように努めます。また、入会案内リーフレットは各大学へ協力を依頼して積極的な配付を行い、学生に対する学会知名度向上と入会者増につなげます。

## (7) 将来構想の検討

時代の変化に合わせた、より有益な広報活動を目指し、継続的事業に対する評価と新規事業の検討を行います。

## 4 他機関との交流協力とグローバル化の推進

他機関との交流と協力をはかり、広く社会に貢献します。

### (1) 共同主催、共催、後援、協賛

日本学術会議における薬学研究者の活動を支援するため、シンポジウムを共同で主催します。また、本学会と密接な関係を持つ団体が主催する関連学術集会（国内、国際）の共催、後援、協賛を行い、薬学研究者の活動を支援するため他機関との連携を進め、環境を整えます。

### (2) グローバル化の推進

#### ① 国際薬学連合（FIP）に関する活動

全世界 400 万人の薬剤師および薬科学者を擁する FIP に Member Organization として加盟し、世界における本学会のプレゼンスを高めるべく活動しています。活動の成果を発表するべく、第 141 年会（広島）でも「FIP フォーラム」を開催します（テーマ「One FIP strategy and Japanese contribution to pharmaceutical sciences」）。また、FIP2021 年会（2021.9.12-16、セビリア）への代表者派遣等を行います。FIP 主催「PSWC (Pharmaceutical Sciences World Congress) 2023」（2023 年 5 月 28～31 日、横浜、組織委員長:鈴木洋史氏）の開催に協力します。アジア太平洋地区の次世代の薬科学者ネットワークを形成することを目的とした FIP と本学会の共同事業を新事業として立ち上げ、具体的な計画の立案を行います。日本 FIP 連絡会議に、FIP に加盟する他の国内 3 団体とともに参加し、共通の利害関係事項に関して協力して対処しています。

#### ② その他の国外団体との交流

##### ・ドイツ薬学会（DPhG）

同会年会に本学会代表者を派遣します。

##### ・韓国薬学会（PSK）

第 141 年会（広島）にて同会から講師 2 名を招き、日韓合同シンポジウムを開催します。

##### ・カナダ薬学会（CSPS）

同会からの共同開催の提案を受け、CSPS-PSJ Banff 2021 Conference（2021 年 6 月 1 日～4 日）を共同開催します。テーマは“Pharmaceutical Sciences in a Pandemic World”です。

・アジア医薬化学連合（AFMC）主催「AIMECS (AFMC International Medicinal Chemistry Symposium) 2021」（2021 年 11 月 29 日～12 月 2 日、東京、組織委員長:金井求氏）を開催します。

## 5 学会基盤の整備・確立

## 1) 会員関連

### (1) 会員増強への取り組み

日本薬学会は、社会的要請に応え薬剤師養成の任を果たすとともに、日本のアカデミアおよび企業における基礎・創薬研究において、有機化学、生物学、分析・物理化学の観点から大きな貢献を果たしてきました。近年では医療関連研究にも注力しています。

特に、研究集会開催などによる学術研究への寄与、国際化や薬学教育改善への取り組み、薬学生への支援事業、海外会員獲得の取り組みなど活動は多岐に渡っています。

次世代の更なる発展へ向けて、これらを一層充実するためにも、学会活動の基盤となる会員数の減少をくい止め会員増加を目指します。

### (2) 名誉会員、有功会員ならびに永年会員の推薦

定款第5条に基づいて、代議員総会において名誉会員を決定し、理事会において有功会員および永年会員を決定します。

## 2) 長井記念館の維持管理

現長井記念館は竣工から約30年が経過し、今後、修繕費の一層の増加が見込まれます。大規模修繕の一環としての空調改修工事は2019年3月に無事終了いたしました。以降の修繕計画についても、本学会が主体的に検討し、本館の管理代理者であるエム・ユー・トラスト不動産管理株式会社とともに会館の改修・諸設備の保守・管理を策定・実行いたします。

## 3) 賃貸収入と会館の運営

公益社団法人日本薬学会では、収益事業である会館の賃貸利益の多くを、公益事業である本部・支部・部会の学術事業に繰り入れております。このように、本学会の運営において、長井記念館は大きな財政基盤となっており、その維持・更新は不可欠なものであります。従って、会館への再投資のための準備金の積立を計画的に行う必要があります。本学会では、新型コロナウイルスの感染拡大という未曾有の状況も踏まえ、変化する社会情勢に対応して、学会運営を可能とするため、専門家の意見も積極的に取り入れ、長期的な視点で堅実な計画を立ててまいります。

また、良質なテナントの確保に努めることにより、適正な収入を受取できるよう努めます。会館の各施設および設備の効率的な利用の向上を積極的に計ることで価値を高めるため、改善計画を策定してまいります。

## 4) デジタル技術を活用した学会活動・運営の効率化

2020年は新型コロナウイルス感染防止対策のため、日本薬学会年会をはじめ各種の学術集会がオンライン開催になり、理事会、部会や支部会などの会議のオンライン開催が急速に一般化しました。学術集会のオンライン化は情報交換・交流活動の低下に繋がると危惧される一方、各種会議のオンライン化は、移動時間・会議費用の削減、ペーパーレス化、さらには、状況に応じて臨機応変に開催できるなど、歓迎すべき面も明らかになりました。本学会では、新型コロナウイルス収束後もデジタル技術を活



用したデジタルトランスフォーメーション（DX）を、学会運営の効率化と学術活動の  
より一層の発展のために実施する計画を立てて参ります。